



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パネル「コルチャーク政権とシベリア出兵」
Author(s)	兎内, 勇津流
Citation	ロシア史研究, 113, 76-77
Issue Date	2025-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95292
Type	journal article
File Information	Tonai_2025_113_76-77.pdf



パネル「コルチャーク政権とシベリア出兵」

兎内 勇津流

一九一八年九月のウファ国家協議会で成立した執政政府と臨時シベリア政府は、一九一八年一月初めに統一政府（全ロシア臨時政府）となるが、直後の一月一日に首都オムスクで政変が起こり、アレクサンドル・コルチャークを最高執政官とする政権に衣替えた。

コルチャーク政権（オムスク政権ともよばれる）はウラル以東の広大な地域を支配したものの、一九一九年六月以後急速に勢力を失い、一月にはオムスクを放棄して東に向かった。政府は崩壊し、一九二〇年一月初めにコルチャークが退陣して消滅した。

当初日本はコルチャーク政権に冷淡だったが、一九一九年五月に承認方針を決定し（結局正式承認には至らず）、軍事援助を行った。しかし、同政権の崩壊によりシベリアがソヴィエト政権の下に入り、極東でも次々と革命派の政権が樹立されて、シベリア出兵は最大の転換点に立つことになった。

本パネルでは、中嶋毅「コルチャーク政権下のニコライ・V・ウストリヤロフ」、兎内勇津流「アナトーリー・ペペリヤーエフ（二八九一―一九三八）とシベリアの内戦」、及川琢英「ウラジ

オ派遣軍の撤兵と押収武器問題」という三つの報告があった。

中嶋報告のウストリヤロフは、内戦後ハルビンで活動した法学者であり、ソヴィエト政権への協力を唱えた道標転換派の人物として知られる。彼は一九一九年二月以降オムスクで政府の宣伝活動に深く関わるとともに、政権を支えるカデット党東部の政論家として精力的に活動した。ウストリヤロフは、コルチャークの独裁体制とロシアの統一維持を擁護し、一九一九年夏以降政権の危機が深まる中でもその立場を維持した。彼にとってはロシアの統一維持が内戦の帰趨以上に重要であり、その後白系政権によるロシア統一の不可能が明らかになると、反ボリシェヴィキ武装闘争の放棄を主張し、ソヴィエト権力支持にその立場を転じたのである。

兎内はアナトーリー・ペペリヤーエフという軍人について報告した（兄ヴィクトルも登場するため、以下アナトーリーと記す）。アナトーリーは十月革命後トムスクに入り、一九一八年五月にチェコスロヴァキア軍団（以下「チェコ軍団」）が蜂起するとこれに乗じて蜂起し、チェコ軍団と共同して八月末までにシベリアか

らソヴィエト勢力を一掃した。十一月の第一次世界大戦終結とコルチャーク政権の成立は、状況を一変させた。チェコ軍団が戦闘から退いた。また新政権は思ったほど国際的支援を得られなかった。カデット党東部で活動したヴィクトルはこの後政府に入り、一九一九年一月には首相に任命される。コルチャーク政府軍は一九一八年十二月にペルミを占領した。アナトーリーはこの時大きな声望を得たが、その後は苦戦する。赤軍が充実する一方、コルチャーク政府軍は兵員の質の低下、補給の崩壊に苦しむ。結局七月にペルミを再占領され急速に退却していった。

アナトーリーは独裁支持だったはずが、八月になると「民主化」要求を打ち出し、一二月には兄とともにコルチャークに要求を突きつけたが失敗した。この直後、アナトーリーが上官を「逮捕」する事件を起こす。コルチャーク政権が消滅すると、ヴィクトルはコルチャークとともに一九二〇年二月に銃殺された。アナトーリーはザバイカルを経て同年四月にハルビンに移る。その後一九二二年に義勇兵を率いてサハに入り、反ボリシェヴィキ武装闘争を試みたが、翌年六月に降伏し服役した。

ペペリヤーエフ兄弟の民主派転向は奇怪に見えるが、政権自体に軍事独裁とは異質な不可解な部分があった。その背景にはチェコ軍団の蜂起を起点に展開した、ロシア東部の白系諸勢力をめぐる力学が想定される。

最後の及川報告は、シベリア撤兵過程での派遣軍を扱ったものである。この時期政府（特に原内閣）はよく軍を統制していたと

されるが、話はそう単純ではない。ウラジオ派遣軍は一九二〇年四月初めに沿海州で武力衝突を起こした。これについて雨宮昭一が「派遣軍が「偶然」・陰謀によって「統帥権独立」を保護しようとしたもの」と述べたことは重要である。このように、派遣軍が政府・陸軍省の方針に対抗できない場合、「陰謀」の形でこれに反する行動をとった例が見られるのである。

一九二〇年四月の武力衝突時、日本軍は大量の武器を押収したが、この処理が問題だった。政府は極東共和国への交付を決定したが、派遣軍は白系政権に回す余地を残したかった。また一九二二年に奉直戦争が起けると、張作霖と関東軍は派遣軍に再三武器引き渡しを求めた。立花小一郎派遣軍司令官はこれを拒否し続けたものの、実のところかなりの武器が奉天に運ばれていた。また、特務機関長を窓口に白系政権に武器が交付された。陸軍省は問題が露見してもその解明・処罰を最小限にとどめ、それによって参謀本部・出先軍を抑える立場が崩れていったとみられる。

この後、櫻井良樹氏からコメントをいただいた上で、若干の質疑を行った。氏は日本政治外交史の専門家であるが、報告をよく理解し適切な議論を引き出してくださった。

シベリア出兵は、ロシア革命・内戦史と日本の政治外交史、さらに東アジアの国際関係が複雑にからむ事象で、よくわからない点がまだまだ多い。共通論題「いまロシア史をどう書くか——個別史と世界史のあいだ」にも通じるが、ここはまさにロシア史や日本史という枠を越境した研究が必要な領域なのである。